

マンモグラフィにおける人材育成

ー認定機構での活動経験からー

東北大学病院 診療技術部放射線部門 千葉 陽子(Chiba Yoko)

【はじめに】

私は、入職1年目よりマンモグラフィ業務に携わる機会を得た。それもあり、若い頃からマンモグラフィ関係に興味をもち、学術研究や講習会講師等を行ってきた。これらの業績を認めていただき、現在、日本乳がん検診精度管理中央機構の技術委員として活動を行っている。では、その日本乳がん検診精度管理中央機構とはどのようなものか、そして、私がどのような活動を行っているのか、放射線技師としてかかわった他の組織での活動を紹介したいと思う。

【日本乳がん検診精度管理中央機構について】

現在、乳癌は9人に1人が罹患する癌である。ただ、早期ほど予後が良好であるため、早期発見すれば死亡率を低減することができる。そのため、乳がん検診が非常に重要となる。乳がん検診において、科学的に死亡率低減効果が証明されているのはマンモグラフィによる乳がん検診のみである。マンモグラフィ検診のエビデンスは欧米でのランダム化比較試験で証明されており、その有効性は50歳以上の年代では明らかであると評価されており、マンモグラフィは非常に重要である。

がんの死亡率を低下させることが出来る唯一の検査法であるというエビデンスに基づき、2000年の厚生労働省通達（老健第65号）により、50歳以上の女性にマンモグラフィ検診（対策型検診へ）の導入が決定された。そして、平成10年、老健法第64号として「がん予防重点健康教育及びがん検診実施のための指針」が出された。これは、乳房X線検査を検診に取り入れる留意点を示している。検診実施機関は、装置が基準をみたしているか、実施施設は画像評価を受けているか、技師は認定をもっているか、など、マンモグラフィ検診を行うにあたり、必須である装置、技術、安全の管理体制も定めている。これらマンモグラフィ検診の精度管理について厚生労働省および日本放射線技術学会とともに検討し、その管理運営を行うことを目的として設置されたものが、日本乳がん検診精度管理中央機構である。

日本乳がん検診精度管理中央機構（以後、精中機構）は、画像を用いた乳がん検診の精度管理について検討し、医師・放射線技師・臨床検査技師・看護師や検診実施機関・精密検査実施機関、一般住民や患者団体に対して、教育研修・評価認定事業、検診啓発事業、患者団体との連携等の事業を全国規模で行なうと共に、本邦内外における精度の高い画像を用いた乳がん検診の普及、ひいては乳癌死亡数低下のために寄与することを目的とし、活動を行っている。2004年6月に特定非営利活動（NPO）法人として認可され、これまでに全国でMG読影、撮影技術講習会を開催し、多くの医師、技師が認定されている。またMG撮影装置の施設認定も行っている。今後の超音波検診を見据えた学術団体も追加され、現在、日本乳癌検診学会、日本乳癌学会、日本医学放射線学会、日本放射線技術学会、日本医学物理学会などの関連9学会から成り立っている（Fig.1）。

精中機構は、教育研修委員会、施設画像評価委員会、レビュー委員会の3つの組織にわかれている。教育研修委員会では、医師・技師に対し、診断精度を一定に保つための教育研修を目的にマンモグラフィ講習会を開催している。読影医師の認定や撮影技師の認定もここで行っている。開催運営はマンモグラフィに精通し、精中機構側で任命された読影委員、技術委員が中心となって行っている。施設画像評価委員会は、施設への認定を行っている。評価基準に合格した施設には施設画像認定証を発行し、施設の画質や線量を保障することにより、受診者への安全と安心をも保証している。レビュー委員会は、検診マンモグラムの判定において疑義が生じた時、該当マンモグラムの画質・読影判定を客観的に行うことによって、紛争の回避、あるいは早期解決をはかる資料を提供している（Fig.2）。

【精中機構での活動内容】

私は教育・研修委員会の技術委員として主に活動を行っている。技術委員は、乳がん検診の教育、啓蒙活動を全国に広めるため、全国各地に配置さ



Fig.1 日本乳がん検診精度管理中央機構構成図

れており、現在、19人で活動を行っている。

主な活動内容は、

- 医師・技師・看護師に対する教育研修・評価認定事業
- 検診実施機関・精密検査実施機関に対する評価認定事業
- 検診啓発事業
- 患者団体との連携事業
- 検診画像のコンサルテーション事業
- 国際交流事業

であるが、主に技術講習会、更新講習会の開催、学会や講習会でポジショニングなどの技術指導等を行っている。

【技術委員で活動するまでに苦労したこと】

私は、入職1年目でマンモグラフィの業務に携わることができ、認定技師も取得させていただいた。学術研究も多数行い、また講習会で講師経験もさせていただいた。そして、いろいろな経験を積み、現在、技術委員として活動をしている。ただ、技術委員になる事は簡単なことではなく、努力と苦労が多かった。まずは誰にも教えてもらえないこと。全てが自己研鑽。また、推奨ポジショニングを覚え直すこと。講義や指導するためにあらゆる乳癌に

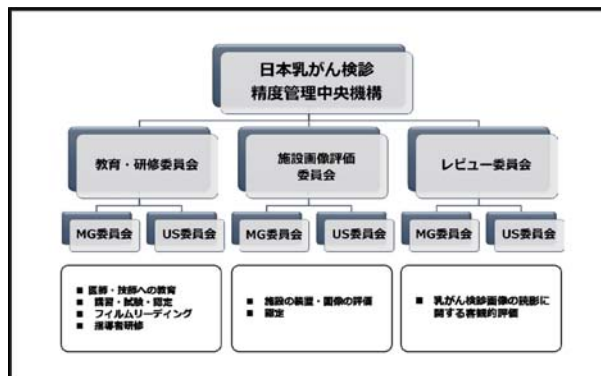


Fig.2 日本乳がん検診精度管理中央機構組織図

関して理解する必要があること。そのために猛勉強したこと（現在も継続中）。理解をしてもらう、次につながるような指導をしなければならないこと。また、苦手な英語と向き合う必要があったこと。技術委員は適任な人材が求められ、プレッシャーがいつもあること。このような苦労がいつもあり、一言で表すと、技術委員になるまでの道のりは非常に大変であった。しかし、これまでに苦労して得た知識や技術は、乳癌の死亡率減少のために大いに貢献できているので、これからも技術委員として努力し、積極的に活動していこうと思う。

【さいごに】

指導する立場は、人に理解してもらう知識と技術が必要であると実感している。説得のある知識を得るためには、やはり学術研究が必要であると思う。学術研究によって、理解も深まり。理解が深まれば説得のある指導ができるようになり、管理もできるようになる。また、教えてもらうのを待つのではなく、自分から進まなければスキルは身につかないし、成長しないと思う。これから指導的立場に立つ方には、ぜひ、積極的に取り組んでいただければ、自ずと結果がついてくると思うので、ぜひ、スキルを活かし活躍していただければと思う。